第4室　楽器　展示解説

N- 102 七弦琴（しちげんきん）

胴の内部にある墨書から、中国・唐の開元 12 年（724）に琴材の産地として知られた四川省彭州（ほうしゅう）で作られたことがわかる、七弦琴の名品です。キリ材製で全体に黒い漆を塗り、表面に弦の押さえどころを示す 13 個の螺鈿（らでん）の徽（き）を埋め込んでいます。漆塗膜の表面には、細い線状の牛毛断（ぎゅうもうだん）や渦巻状の梅花断（ばいかだん）などの断文（だんもん。細かい亀裂）が多く見られます。こうした断文は、その品が経てきた長い年月を象徴するものとして、古くから賞玩の対象とされました。

N-107　彩絵鼓胴（さいえこどう）

伎楽に用いられたとみられる鼓の胴です。木製で、椀形の乳袋（ちぶくろ）の縁と中央に二条の、乳袋を繋ぐ棹の中程に三条の筋を造り出し、棹には複弁の蓮弁文（れんべんもん）を、その他の部分には宝相華（ほうそうげ）文をそれぞれ繧繝（うんげん）彩色で描いています。彩色の剥落（はくらく）が著（いちじる）しいのですが、N-108 の「彩絵鼓胴」とともに製作当初の華やかな姿が偲（しの）ばれる、奈良時代の貴重な作例です。乳袋内部に記された墨書「三　鵤東院」は、法隆寺東院の三之鼓を意味し、当時法隆寺で「東院」の呼称がすでにあったことがうかがえます。

N-108　彩絵鼓胴（さいえこどう）

N-107 の彩絵鼓胴と同様に伎楽に用いられたとみられる木製の鼓の胴です。中央の棹には蓮弁文（れんべんもん）を、その他の部分には霊芝雲（れいしうん）や宝相華（ほうそうげ）文を繧繝（うんげん）彩色で描いています。椀形の乳袋（ちぶくろ）の口縁近くに、魚々子（ななこ）地に花文を彫り表した六弁花形の座金（ざがね）をあしらった吊鐶（ちょうかん）金具を付けています。全体に量感豊かな堂々とした姿は、いかにも奈良時代らしい趣を湛（たた）えています。乳袋内部の墨書「鵤東院二」は法隆寺東院の二之鼓を意味しています。

N-109　黒漆鼓胴（くろうるしこどう）

乳袋（ちぶくろ）内部の墨書から法隆寺で聖霊会（しょうりょうえ）に用いる楽器として、南北朝時代の延文２年（1357）に、薬師寺伝来の三之鼓を写して製作されたことがわかります。キリ材を轆轤（ろくろ）挽（び）きで成形し、表面は黒漆塗り仕上げとして、内部は素地のままとする実用的な鼓胴です。

N-106-1 羯鼓（かっこ）

羯鼓は、鼓胴の両端に鼓皮をあて、調緒（しらべお）で締めて組み立て、木製の台に載せ、両手に持った桴（ばち）でたたいて演奏する鼓で、雅楽に用いられます。天保 13 年（1842）の『御宝物図絵 追編』（ごほうもつずえついへん）では「石筒羯鼓」と記され、長らく瓦製の鼓胴と考えられてきましたが、近年のエックス線透過撮影による調査で木製であることが判明しました。 鼓胴の外面に獅子（しし）・牡丹（ぼたん）を彩色で描き、両端は黒く縁取り、切箔（きりはく）で連珠文（れんじゅもん）を表しています。

N-110　羯鼓台（かっこだい）

羯鼓を載せて演奏するための木製、朱漆塗りの台です。刳（く）り形（がた）をつけた２枚の板脚の間に天板を挟み、その両端に突起を付けています。天保 13 年（1842）の『御宝物図絵』（ごほうもつずえ）に本品は収載されており、一方、N-106-1 の羯鼓は『御宝物図絵 追編』に収められておりますが、天板の突起の内側に刳られた窪みに鼓皮の位置がよく合うことから、これらは一具をなしていたと考えられます。

N-104　尺八（しゃくはち）

尺八は唐楽（とうがく）で用いられる縦笛で、三節の竹に半月形の吹き口を作り、表側に５個、裏側に１個の指孔（しこう）を開けています。今日使われている尺八（虚無僧〔こむそう〕尺八）とは指孔の数などが異なる古代特有の楽器で、正倉院宝物中に類例が伝わっています。本品は、鎌倉時代前期の『古今目録抄（ここんもくろくしょう）』に、聖徳太子が法隆寺から四天王寺に赴く途中、椎坂（しいさか）という場所でこの笛を吹いたところ、山神がそれに応じて舞ったという伝承が記されており、聖徳太子ゆかりの品として大切に伝えられてきたことがわかります。

N-105　横笛（おうてき）

龍笛（りゅうてき）とも称し、尺八とともに唐楽（とうがく）の楽器として用いられました。歌口（吹き口）と第１孔との間で２本の竹をつなぎ、７つの孔（あな）を開けています。孔を除く表面には桜の皮を巻きつける樺（かば）巻きが施されています。笛の頭端部を蜜蝋（みつろう）でふさぎ、先端には青地金襴（きんらん）を貼り、周囲に朱漆を塗っています。七弦琴（しちげんきん、N-102）などとともに法隆寺の西室（にしむろ）に伝わりました。

N-103　琴柱（ことじ）

琴柱は琴（こと）や箏（そう）の弦を張り、音程を調節するために使う道具です。この

琴柱は形状から、新羅琴（しらぎごと）の 12 本の弦を張るために使用したと考えられます。形状は裾（すそ）を広げた山形で、頂上に弦を渡す溝を彫り、底面に半月形の刳（く）りを付けています。木製で、表面には漆塗りを施し、切箔（きりはく）の技法で葉のような文様（もんよう）や頂部の縁取りを表しています。